

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

標本資料と現地社会とをつなぐマルチメディア・コンテンツ<基幹研究：中央・北アジアの物質文化に関する研究：民博収蔵の標本資料を中心に>

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺村, 裕史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009949

標本資料と現地社会とをつなぐ マルチメディア・コンテンツ

寺村 裕史

プロジェクトの目的

国立民族学博物館（以下、民博）には、北アジア地域や中央アジア地域から収集された多数の文化資源（標本資料や映像・音響資料）が収蔵されている。これらの資料の一部を活用して展示更新をおこなった中央・北アジア展示を平成28（2016）年6月に公開した。この展示を新構築する過程で、当該地域の標本資料に関する調査が実施され、大量の研究情報が蓄積された。しかし、展示場や民博ホームページで現在一般公開されている情報は、その一部に過ぎない。

そこで本プロジェクトでは、東はロシアのチュコト半島・カムチャッカ半島から、ロシア極東・シベリア、モンゴルを経て、西は中央アジアにいたる広大な地域を対象に、同地域の物質文化について民博収蔵の標本資料を中心に現地社会や海外の研究機関と連携しながら研究を実施し、その成果をデータベース化し、フォーラム型情報ミュージアムから発信することを目的とした。

データベースの概要と特徴

そうしたプロジェクトの目的を達成するために、研究対象となる広大な地域を、民博の中央・北アジア展示場の展示セクションにしたがい、中央アジア、モンゴル、シベリア・極北の3地域に分け、民博が収蔵している当該地域の標本資料に関する情報を高度化・多言語化し、その成果をもとに「中央・北アジア物質文化資料データベース」を構築した。

データベースに格納された3地域それぞれの標本資料件数は、以下のとおりである。

- （中央アジア）標本資料件数：1,198件
- （モンゴル）標本資料件数：2,960件
- （シベリア・極北）標本資料件数：879件
- 【3地域合計：5,037件】

これら地域ごとの資料には、データベースのトップページから「データを全件表示」をクリックすることで検索・表示・閲覧できるようになっている。

また、個別資料の詳細表示画面においては、日本語・英語の表示言語切り替えに加え、現地名のラテン文字表記・現地綴り（たとえば、現地名のロシア語キリル文字表記）など、詳細が確認できている資料については、それらを項目に追記することにより多言語化を実現している。

検索方法に関しては、基本的なフリーワード検索や、標本名・使用民族・OCM (Outline of Cultural Materials) などの項目から絞り込む項目検索、資料名・民族名のリストからの検索など、利用者の目的によって検索方法を選択できるようにデータベースを構築している。なお、資料情報の項目のなかにある「OCM」については、イェール大学のキャンパス内にある Human Relations Area Files, Inc. (略称：HRAF フラーフ) 本部の許可を得て、3桁の数字に加えて、その分類の詳細【例：291 (一般的服装)】も併記し、利便性を向上させている。

さらに、本データベースの最大の特徴は、上記の検索方法だけでなく、「パノラマムービーから検索」する機能や、「民家模型（タシケントの民家）」の青焼き図面、プロジェクトで製作した長編映像、『月刊みんぱく』の記事など、標本資料に関連するマルチメディアの情報にもアクセスできるような仕組みをもっていることである。単に標本資料の検索を行うだけでなく、関連する情報も同じデータベースに格納することにより、物質文化情報の高度化の一環として有効的だと考えた。

マルチメディア・コンテンツの実装と活用

次に、先の概要で述べたマルチメディア・コンテンツの詳細について紹介したい。

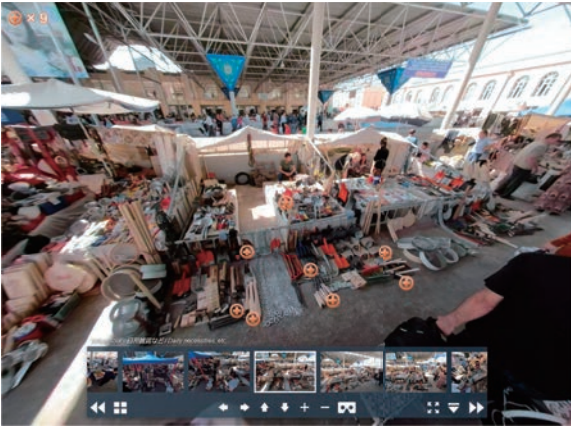
中央・北アジアの物質文化資料情報を充実させ、関連する情報として参照できるように、下記マルチメディア・コンテンツをデータベース内で閲覧可能なWEBページ構成とした。

- ①「パノラマムービーから検索」：【データベースとの連携】
- ②「民家模型（タシケントの民家）青焼き図面」：
【図面のJPG画像登録】
- ③『タシケントの民家再訪』（映像）：
【インタビュー映像番組の登録・視聴】
- ④『月刊みんぱく』の記事：
【中央・北アジア関連記事へのリンク】

①は、サマルカンド（ウズベキスタン共和国）のバザールの360°パノラマムービーを編集・制作し、パノラマムービー内に写り込んでいる現地資料をクリックすることで、民博で収蔵している該当の標本資料情報を表示させるという、データベースとの連携機能を実現している。これは、資料名などから検索するのではなく、実際に現地が使われて（売られ

寺村 裕史（てらむら ひろふみ）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は情報考古学、文化情報学。ウズベキスタン・インドや日本などをフィールドに、文化資源のデジタル化・情報化に関する研究や、GIS（地理情報システム）を援用した歴史文化研究を主要なテーマにしている。おもな著書に『景観考古学の方法と実践』（同成社 2014年）などがある。



「パノラマムービーから検索」の一面。
画面内に表示されている「🔍」マークをクリックすると、該当する本データベースの民博収蔵資料の一覧ページに飛ぶことができる。

て）いる品物のなかからそれに類似する民博収蔵資料を探すという、いわば逆引きの発想である。

②は、「民家模型（タシケントの民家）」【標本番号：H0105532】の模型製作の元となった設計図（青焼き図面）をスキャニングし、デジタル化のうえ画像としてデータベース内で閲覧可能にすることで、製作の裏側を知ることができるようになった。またこの青焼き図面そのものも、貴重な文化資源でもありえよう。

③は、現時点では肖像権の問題などから関係者のみが閲覧できる限定公開ではあるが、②の民家模型と直結した映像編集ならびに番組制作を実施し、約25分間の『タシケントの民家再訪』という映像番組に仕上げデータベース内に格納し、視聴できるようになっている。

④は、『月刊みんぱく』で既にオンライン公開済みの中央・北アジア関連の記事へのリンクをデータベース内に貼り込むことで、当該地域への理解を深めるための参考資料へのアクセスを容易にすることが可能となっている。

標本資料と現地社会とをつなぐマルチメディアコンテンツ

本研究プロジェクトの成果は、大きく分けて、1) ユーラシア大陸に広がる中央・北アジア地域の民博収蔵標本資料に関する情報の高度化、2) それをもとにした中央・北アジア物質文化資料データベースの構築、3) データベースを用いたプラットフォームとしての国際共同利用・共同研究の推進、

4) 現地ソースコミュニティへの研究成果還元、が挙げられる。

そうした一連の研究のなかで構築されたデータベースにおいても、標本資料と現地社会とをつなぐマルチメディア・コンテンツが果たす役割は大きなものがある。サマルカンドのバザールの360°パノラマムービーと民博の収蔵資料との連携は、バザール内をヴァーチャルで散策しながら、売り手と買い手である現地の人びとの様子やそこで売られているさまざまな雑貨や衣服・食糧品・農具などを眺め、かつそのなかで民博に収蔵されている「モノ」が存在すればその情報にアクセスできるという、現地社会と密接に結びついたコンテンツである。

さらに『タシケントの民家再訪』（映像）も、展示場に展示されている民家模型が製作された30年前の事情を知るインフォーマント（家主）にインタビューし、30年後の現在の民家（と居住する人びと）の姿を映像として記録したものを編集のうえ制作された番組は、民博収蔵の標本資料と実際に現地モノ（民家そのもの）が使われている様子（物質文化）とを繋ぐ貴重な文化資源といえる。これは、本プロジェクトにとっても現地社会との双方向の情報のやり取りを目的のひとつとするフォーラム型の実践例として大きな成果である。

また、インタビューの結果、この地域が都市開発の波にさらされており住人が立ち退きを要求され民家そのものも壊される可能性があることが判明し、映像記録自体が30年前と現在の現地での暮らしの様子を伝える貴重な資料として意味をもつ。30年前当時の姿を伝える民家模型の存在だけでなく、模型のモデルとなった民家にまつわる家主の記憶と、壊されるかもしれない現状への思いを文字情報だけでなく映像で記録し後世に残すことで、現地への還元だけでなく、そこで暮らしている人びとの視覚的な記憶の継承にも資することができると考えている。

本プロジェクトは、広大な中央・北アジア地域における民博が収蔵する物質文化資料を対象としているが、単に標本資料情報の検索・閲覧にとどまるのではなく、そうした資料を実際に使っている現地社会の人びとの暮らしや文化にも目を向け、民族誌を描き出すための一助となるデータベース構築を含めた一連の研究成果と評価できるだろう。